



本田 和登さん
Kazuto Honda

〔中横田区〕

オリンピックに出場するような
トップ選手からも「熊本のおじ
いちゃん」と親しみを込めて呼
ばれる本田さん。長年にわたり
監督や選手一人ひとりと向き合
い、誠実に信頼関係を築いてき
たからこそ、多くの選手がこの
甲佐の地に集い続けている。

大会の歩みを支え続けて 第50回の開催へ導いた情熱

本年度で第50回を迎えた「熊
本甲佐10マイル公認ロードレ
ース大会」。世界陸上やオリ
ンピック出場選手、全日本実
業団駅伝や箱根駅伝に名を連
ねるトップランナーたちが集

うロードレースとして全国に
知られている本大会の歩みを
語る上で欠かせない人物が、
本田和登さん（中横田区）。
本田さんは、町職員だった
ころの第6回大会から本大会

の運営に携わり、退職後も選
手勧誘や大会運営など、支え
続けている存在。「本田さん
なくして、この大会は続いて
いなかった」と関係者が口を
そろえるほど、その貢献は計
り知れない。本田さんは、「今
でこそ全国から選手が集まり
ますが、ここまでの道のりは
試行錯誤の連続でした」と笑
顔で大会の歴史を振り返る。

大会の前身は、昭和27年か
ら昭和50年まで開催されてい
た「甲佐マラソン大会」。交
通事情の変化により一度は継
続が難しくなったが、昭和51
年に「10マイル甲佐マラソン
大会」として現在のコースに
近い形で再出発した。その時
から本田さんは、「全国レベ
ルの大会にしなければ、甲佐
町の名も大会に残らない」と
考えるようになったという。

転機となったのが、第8回
大会からの日本陸上競技連盟
公認コースの取得。「名称に
あえて『熊本』を入れたのは、
甲佐町の名前を全国に知って
もらうためでした」と話す。

しかし、公認大会となっても
予算は限られ、実業団との
つながりもほとんどなかった
ため、「最初は、各県の陸協
にお願いして、1〜2人派遣
してもらったのが精一杯でし
た」と苦い表情の本田さん。
そんな中、九州屈指の強豪で
ある旭化成陸上競技部に目を
向けるが、面識のない状態で
の依頼は厳しく、最初は「甲
佐町はどこですか」と一蹴さ
れたという。

それでも諦めなかった本田さ
ん。「挑戦せずして駄目と思
うな」の信条のもと、延岡へ
何度も足を運び、ついに第10
回大会で旭化成からの選手派
遣が実現する。このことをき
っかけに「甲佐10マイル」の
名が世に広まり始め、他の実
業団チームも少しずつ参加す
るようになった。

本田さんは、九州各地で開
催される大会に足を運び、監
督や関係者と顔を合わせ、地
道に信頼関係を築いていつ
た。それは50回を迎えた今も
続いている。「まず大会を知
ってもらうこと。そして、応
えてくれたことに感謝するこ
と」。その積み重ねが、全国
から選手が集う現在の大会へ
とつながっている。

「私の原動力は、熱意と絆
（きずな）、そして感謝です」
と語る本田さん。第50回とい
う大きな節目を迎え、「この
大会が、世界へ羽ばたく選手
たちの登竜門として、これか
らも成長していくことを願っ
ています」と、穏やかな笑顔
で駆ける選手たちと甲佐10マ
イルの輝く未来を見据える。